様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6　月　1　日現在

機関番号：12603
研究種目：基盤研究（ｃ）
研究期間：2010　～　2012
課題番号：２２５２０５５４

研究課題名（和文）　国際間の語学共学システムの構築に関する研究

研究課題名（英文）　International Language Coeducation System Construction　Research

研究代表者
林　虹瑛　（LIN HONGYING）研究者番号：９０５７３６４２
東京外国語大学　アジア・アフリカ言語文化研究所　研究員
研究者番号：90573642

研究成果の概要（和文）：

E-ラーニングは現代教育の新しい方法である。しかし、マルチメディアの使用だけは学習者に著しい学習効果をもたらした要因ではない。この研究の目標は国際間語学協働講義の有効性を示すことである。ターゲット言語を使用して、工夫された教室活動のリアルタイム参加することによって、学習者はさらに交流的かつ実践的な言語学習を経験できることが分かった。

研究成果の概要（英文）：

E-learning is emerging as the new paradigm of modern education. Although the multimedia nature of e-Learning is not the significant factor that influences learning. The aim of this research is to discuss how International Language Coeducation System Construction can be used effectively in classroom, and how it can support learners to experience as more communicative and practicing language learning by participating designed classroom activities in target language in realtime.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：基盤研究 C・言語学・外国語教育
キーワード：e-ラーニング、コンピュータ支援学習

１．研究開始当初の背景

本研究は、インターネットを活用し、海外の大学と連携した新しい語学教育の方法を探ることを目的としている。多くの国でネットワーク環境が充実し、音声・画像の交換、遠隔地との直接対話に充分な帯域が確保で

きる現在、複数の国の大学をネットワークでリアルタイムで結んで実施する語学教育が可能であるとの認識のもとに、従来の単純な教授法にとらわれない、学生が自主的に参加する効果的な授業の形態について探る。

２．研究の目的

具体的には下記のテーマになる。

・ 国際間の語学共学システムの構築に関する研究

その内容は主に以下の２点について行われる。

(1)インターネットを利用した国際間の語学協働授業シラバスデザインに関する研究

(2)上記インタラクションの観点における授業調査及び本授業方式の評価法に関する研究

３．研究の方法

(1) 語学遠隔協働授業方法の持続的な実施法

本研究では濃密なインタラクションを継続的に図るため、両大学で共通のカリキュラムを設けて共同の講義を実現する。具体的事例としては、時差の少なく、多数の日本語学習者が在籍する台湾の大学と連携して「日本語･中国語語学協働授業」を開講し、同一日時に同一のカリキュラムで講義を実施して、日本語と中国語を運用する。この授業の特徴は、学生が相互に学びあう点にある。インターネットテレビ会議システムとインターネット電話（Skype）を用い、グループ発表や、１対１の対話を実施する。グループ発表では学生が興味のあるテーマを話し合いで選定し、互いに相手のネイティブ言語で発表・質疑応答を行う。１対１の対話では、相手のネイティブの言語を使ってアンケート調査を行って回答を収集し、それを集計した結果に基づきレポートを作成して次の授業で発表する。あらゆる段階で、学生同士で相互にネイティブチェックし、相互に教えあい学びあう関係を構築する。平成 22 年度は共通カリキュラムおよび進行方法を策定する。

また、ミーティングや１対１の対話の過程を記録して復習する作業を効率的に支援する e-Learning 環境を構築し、従来にない語学教育を実現すると共に持続可能な授業として実践する。

(2)語学遠隔協働授業のインタラクション及び授業評価方針の考案

本研究で行う「日本語・中国語語学協働授業」では学生を主体とし、コミュニカティブ・アプローチでシラバス及び授業内容をデザインする。同年代のネイティブスピーカである学生を相手にコミュニケーションをとる機会を設けて、語学力を活用し磨き上げると共に、文化、風俗、習慣、考え方などを互いに学習する。

一方で、語学力（語彙、文法、聴解など）の正確について、適切な評価方針や基準の策定が必要とされる。また、インターネットによって繋がれた双方の講師と全ての学生の間で総合的に形成されるインタラクションは、往来の講師から一方的に知識を学生に教授する授業におけるインタラクションより遥かに複雑である。その解明を行うことは遠隔教育研究にとって非常に重要なステップと考える。22年度は授業内容のサンプリング録画をし、学習者のインタラクションを観察しデータ収集をすると同時にアンケート調査及びインタビューを行い、これらのデータを記録及び分析し、授業評価方針を考案する。

４．研究成果

（１）日中遠隔協働授業について

情報通信技術の発達により、地域や国を跨いだ複数の国を結んだ遠隔教育を容易に実施できる環境が整ったが実現可能となってきた。殊に特に言語教育の場合においては、言語学習者が学習する言語の当該言語のネイティブ話者と直接コミュニケーションをとってふれあい、言語学習活動を行うことが可能となった。この状況を背景に、われわれ我々は、台湾在住の日本語学習者と日本在住の中国語学習者（ともに中級以上のレベル）による日中協働語学講義を開催した。本講義の特徴は、コミュニケーションツールとしてインターネットネットワークを利用し、教員講師が一方的に教授するのでなく、コミュニケーションツールとしてインターネットネットワークを利用し、学習者がネイティブ話者との実際の言語活動を実践に参加する作業を通してことによって、互いの学習言語を学習することにある。本講義の形式の効果を評価するにあたり、われわれ我々は、学習者の活動を観察し、アンケート調査及びインタビューを行った。その結果、活動内容によって異なったインタラクションのパターンが観察され、さまざまな学習効果を得た。

講義には、3 回のテレビ会議システムと 3 回のテレビ電話(WEB カメラ搭載 PC と Skype)を用いた授業を含む、さまざまな活動が行われた。ここでいうテレビ電話とは、PC にヘッドセットと Web カメラを装備することで実現するもので、テレビ会議システムに比べて画

質と音質が制約されるが、手軽につながる 1 対 1 のコミュニケーションを行え、また、複数の対話を同時並行に実施することが可能で、受講学生が充分な対話の機会を確保できる。テレビ会議システム、並びに、テレビ電話を用いた接続授業を実施する際には、授業の時間を日本語時間と中国語時間を設けて、自身の母語、即ち相手の学習言語でコミュニケートする時間と、自身の学習言語、即ち相手のネイティブの言語でコミュニケートする時間を確保する。

講義は実際に接続を行って対話を行う回と、その準備、練習、活動結果のまとめを行う回に分かれる。たとえば、レポートの相互添削活動では、学習者が作成した自分の原稿を相手に送って添削してもらう作業を相互に行い、その結果を TUFS e-Learning システム上に掲載して受講生全員に公開した。接続授業による会話の実習を行うのに加えて、その内容を踏まえて作成した文書に添削を得ることにより学生は自身の表現の弱点を知って改善することを可能とする。

（2）授業評価について

本授業を評価するにあたって、授業アンケートを実施した。アンケートは、5 段階評価方式で、主に設備の利用と言語能力改善について尋ねた。表 2 に 5 段階評価の評価点の平均値と標準偏差を示す。

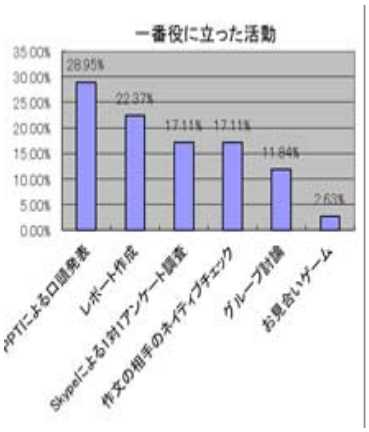
項目 1～3 はテレビ会議システムに関する設問であり、項目 4～6 はテレビ電話に関する設問である。項目 1 と 4 は、音質に関する質問であり、項目 2 と 5 はコミュニケーションツールとしての性能を尋ねるものである。音質の面において、テレビ会議システムの方がポイントが高く（項目 1 と項目 4)、学生にとって、1 対 1 で話せるテレビ電話の方がコミュニケーションツールとしての機能が高いと評価している（項目 2 と項目 5)。また、ターゲット言語での対話の内容が相手に通じた度合いを見ると、テレビ電話の方が若干高い。いずれのツールも、発表形式で利用するときと相手を調査するときに利用するものであるが、テレビ電話の方が、話しやすいという評価となった。項目 7 から 12 は、本授業による学習効果について尋ねたものである。「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の四技能に対して、3.84 から 4.00 となり、語学に必要とされる四技能において満遍なく高い結果を得ていることがわかる。自分の語学力の向上に役に立つかについては 4.30 となった。項目 13 から 16 では、継続的な語学学習において重要な要素である、ターゲット言語への興味や理解についての質問で、これらも非常に高い評価をしていることがわかる。また、ターゲット言語にとどまらず、その他の語学学習や学習意欲にも良い影響になることが項目 15 と 16 の結果からわかる。

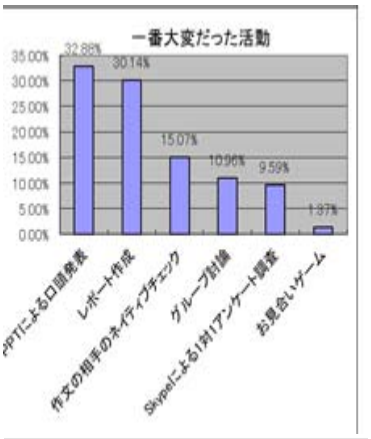
授業アンケート調査評価

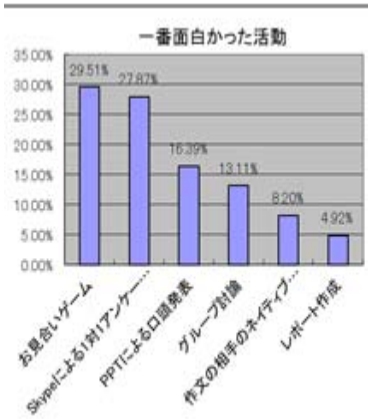
項目	アンケート内容	評価点	標準偏差
1	ビデオ会議システムによる発表は、相手の音声が聞き取りやすかったですか。	3.89	0.75
2	ビデオ会議システムは、コミュニケーションツールとして、十分な性能を有すると思いますか?	3.93	0.73
3	あなたは、ビデオ会議システムで自分のターゲット言語が相手に通じたと思ったか？	3.56	0.80
4	Skype を使って相手と話す際、相手の音声が聞き取れやすかったですか。	3.67	0.83
5	SKYPE はコミュニケーションツールとして十分な機能と性能を有すると思いますか。	4.15	0.82
6	あなたは、SKYPE で自分のターゲット言語が相手に通じたと思ったか？	3.70	0.82
7	この授業で、ターゲット言語のリスニング能力が向上したと思ったか。	3.84	0.77
8	この授業で、ターゲット言語の文法力が向上したと思ったか。	3.85	0.86
9	この授業で、ターゲット言語の語彙数が増えたと思ったか。	3.87	0.75
10	この授業で、ターゲット言語のスピーキング能力が向上したと思ったか。	3.95	0.94
11	この授業で、ターゲット言語のライティング能力が向上したと思ったか。	4.00	0.78
12	この授業を受けることによって、自分の語学力の向上に役に立ったか。	4.30	0.77
13	この授業で、ターゲット言語への興味は、以前より増したか。	3.92	0.98
14	この授業で、相手の国のことをもっと理解したいと思ったか。	4.19	0.90
15	この授業でほかの語学言語の授業をもっと頑張ろうと思ったか？	4.31	0.84
16	この授業で、ほかの語学の勉強に参考となる授業か。	4.34	0.62

台湾側１９名　日本側８名

さらに、ターゲット言語を習得するうえで一番役立った活動、一番大変だった活動と一番面白い活動の上位 3 つを選ばせたところ、結果は、図 1 に示すようになった。ここで示されるように、学生にとってテレビ会議システムによる発表とレポート作成は、一番大変な活動ではあるものの、一番勉強になった活動でもある。これは、ターゲット言語を用いてなんらかの成果を出すため、言語学習にとって非常に難しい作業であると同時に、一番勉強になる活動でもあることと考えられる。一方、「お見合い」ゲームでは、ゲームの要素が含まれているし、テレビ電話によるアンケート調査では、1 対 1 で話し合うため、心理的な負担が小さく、学習者にとって、一番面白い活動であると考えられる。







（３）インタビュー結果と効果的な授業デザイン

有効的な遠隔授業を行うには、設備を整えるのみならず、学習者の自主かつ自律的な学習を促す教室活動及びシラバスデザインが肝心であると考える。筆者らは中級レベル以上の言語学習者を対象とした語学演習授業として、コミュニカティブアプローチを採り入れた語学協働遠隔授業をデザインし、学習者の興味のある事象を自ら課題にし、教室活動で言語を実践的なツールとして運用して資料収集、まとめ、修正、発表に活用するなどの研究過程を協力して完成させる。Moore（1996：167）によれば、遠隔教育ではグループ学習はある種の学習内容を伝達する際に役に立つとされ、特に学生がプロジェクトチームを組んで、他の学生たちに対して発表を行う場合に有益である。一般的に、学習者同士で議論することは、各自が学習内容を深く考察し、他の学生と検証し合う方法として非常に有効である。また、いままでのコミュニカティブアプローチでデザインした語学的教室活動では単一の教室内における非母語話者学習者の作業が中心となっていた。インターネット技術の発展によって、コミュニカティブアプローチでデザインした語学的教室活動は、ターゲット言語のネイティブ話者と直接的に交流しながら、学習できる環境になりつつある。

（４）おわりに

東京外国語大学と台湾淡江大学が実施している共時国際語学協働講義について取り上げた。本講義はコミュニカティブアプローチでデザインし、学生を主体としている語学協働授業である。テレビ会議やテレビ電話を使って、同年代のネイティブ話者の学生と討論をおこなうことによって、実践的に語学四技能を養成することができる。画面上であるとはいえ、ターゲット言語の生の環境を教室内に導入し、ネイティブ話者の学生とコミュニケーションをするという点で、コミュニカティブアプローチにそった授業が展開できる。さらに与えられたグループ課題を制作し、実際のコミュニケーション活動で収集した資料をまとめてPPT発表をおこなう作業を通して、語学力だけではなく、課題研究プロセスの基本構成力、仕事分担などの人間関係協調力も向上する。このように、共時国際語学協働講義はネットワークツールやシラバスデザインを工夫することによって、今後更なる発展が期待できる。

(表と図はほかに添付する)

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①林虹瑛、林俊成、遠隔講義システムを用いたコミュニカティブアプローチ語学教授法による各学習活動の実現と比較、コーパスに基づく語学教育研究報告、2011、6:91-103、査読あり

〔学会発表〕（計　3 件）

①林虹瑛、林俊成、『關於網路遠距語言共同合作學習的有效活動之調查』（語学協働遠隔授業の有効活動調査について）、The 7th International Conference on Internet Chinese Education、Howard International House, Taipei, Taiwan, R.O.C、2012

②林虹瑛、林俊成、『同步網路遠距華語教學實踐』（Practice of Synchronous Distance Learning on Chinese Language Education）、International Conference for Overseas Chinese Heritage and Language Education（CHLE 2010）、臺灣師範大學、2010

③林虹瑛、林俊成、遠隔講義システムを用いたコミュニカティブアプローチ語学教授法による各学習活動の実現と比較、日本中国語教育学会、桜美林大学、2010

〔図書〕（計　3 件）

①陳麗君、蔡承維、林虹瑛、三尾裕子共著、三尾裕子編、台湾語入門、東京外国語大学、2012、273

②陳麗君、蔡承維、林虹瑛、三尾裕子共著、三尾裕子編、台湾語研修テキスト語彙集、東京外国語大学、2012、32

③林虹瑛、王睿琪、黄世忠翻訳、林俊成監修、日華対訳台湾大百科全書専業版知識樹、東京外国語大学、2012、489

〔その他〕

ホームページ等

1

言語研修：台湾語

http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/ilc2012

知識樹ー東京外国語大学

http://www.tufs.ac.jp/common/fs-pg/portal/sien/trmeis/tw/?p=1

６．研究組織

(1)研究代表者

林　虹瑛

(LIN HONGYING)

東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：９０５７３６４２

(2)研究分担者

林　俊成

(LIN CHUNCHEN)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：７０２８７９９４